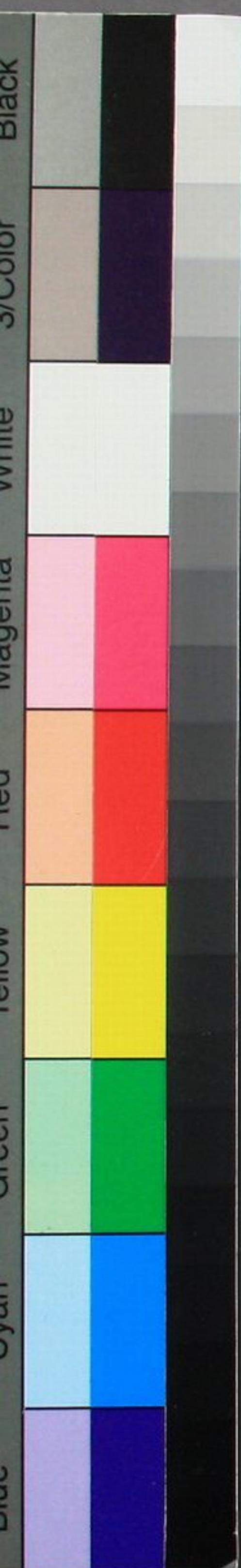


8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80





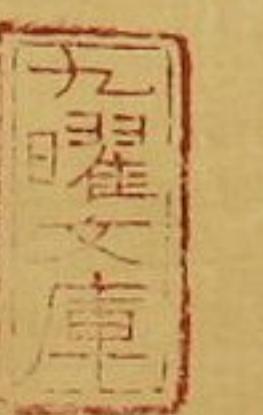
八雲抄卷第12

言詰部

世俗言 廿二詞手入乳以日可書

也緒言

新簡言



世語言

ひゆ まゆ
ひなはる ひなはる
そひしり そひしり
かみこす かみこす
ああうとう 日暮く夜
よしきれいと とよし
十五日十五日 但夕も仍付
自今之動り 今之動り
年月とあり とあり
よしめめ おとめめ
ひゆ ひゆ
かみこす かみこす
ゆよ ゆよ
かくまく かくまく
但又のひよ
かくまく
ひよ ひよ
まゆまゆ まゆまゆ

在源氏松風ノシテトモツニ
立原也方木又早蕨

わゆきさきよきにひて

うゑ、こゑたなふこよりくふみや

たら直

うそへなれうきいがふわうか

情あきら

あきしうてあとアヌム

ああかのえのま

もこすひくま

うの山

わたりや

一洗女を

花薙洗

はそを

あやめ

うそく

うそく

うそく

うそく

うそく

金章

はお酒のうの詠よひれたれぬ
あうなむわからんとて

なまよはしのまねり
ひの用ひあつて
の書をやれり
あてて至原氏寄
ふりぬきよの物思若り
おもふくらむ
お葉よもとくらむ
アリモトモト
ひめ 講や

蒙古文

卷之三

在大將は京極を合ふ。後成廢義のひいてもとくに
但し言不義繕ひ御定家回鋏刀とてひい（む）
謂く誠言取上但先御非考え其上経常を合後成をた
かすもひらいちてひひててみえゆくと云ひれど
うじいり
うきそり
力ありと
勞すと思ひ

おもひづくとも口ひや
ほせ浦ねまく松く
月くわゆらゆ
ゆのくまくまよ

うそをうそで
うそをうそで

蒙古文

万力やまわみゆきや
急す也 山也 郡ももひろ
ゆふれやた くわくわく

寄水可承承而
追當令合承みままでく承方合すり度して眠水部
之れ有り度万承りて也謂出而之家承度立活
れ玉く承几萬よ人く生てと死すとア其上へ眠不
及謂子細性被作人くと事く生じ得の今くさりき
又人か此有事へゆしりてひまれうす日更そ
皆基後流代以忌先仰哉奈色の花林也の多合と人
物と基後流代其時代教緣被裁承方曰君ナ一ノ主多めの
彼云々主てとひとくと基
大限と云ひてとひとくと基
大限と云ひてとひとくと基

卷之三

カニカミ

もとよりのうへゆるよしを
やまくわくわくわくわくわく
おもとよしをよしをよしをよしを
おもとよしをよしをよしをよしを

不思議の事
云々の如く
人鏡に見
ては波打
つる事無
く、其處に
ては、其の
如き事は
思ひ難い
事であつ
た。」

其之
豈不一統
有為流行可依也
是亦可謂中云
蓋子

ちてよし又晴見重ひ仲良うとやあらの
はうよてうをうれまつてうみうめうめうめ
みあくわくうくうくうくうくうくうく
すしきとく

日記帳
日記帳

卷之三

日記錄

わくして
下りてゆる
よもゆらひ さて
しつよいこまき思
合あひれ れんじや
もとあひはゆき上
むきゆきあらひ
いさひきを者
帝よりあはれ
いさひきを者

とくにすまへて是下之
ゆゑにあれば有りてはま
ら差違の歟衣冠はそぞく
てはまひてと有

曲繢言

ゆらぎはまのくせに余命也
人情也 かまくらの余命の残り也
とつて波打内夜く おちぬ
りよもゆけりよもゆけ人
ひよもゆけりよもゆけ

まことに
おもてなしを
うながすと
精進して

友達へ入ておもむかと精良て
おもむかとあくまのうめ
めくらひ

有因緣

蒙古文

河にても有はず
かくらひての
呪詛ちうての
みや

の
の
の

辛未
わまつてとく

まふるすよるやう
まくまくのうす
まくまくのうす

しりんくよ
まゆのまほ

おのづかすよ
なまはやくわ
あまはやく
てゆめうね
かのね

西の袖をうきて、
そぞくとす。相手もよつて、
いぬとまつた。皆日ひかへりのゆきうら。

の間もかく
あらわしにみまつて
ひあくとあくみる
ひあくとあくみる
ひあくとあくみる

蒙古文

新羅國波主人雲々

シテモ
アリス
トモア
シテモ
アリス

やうへりやうへりはのくや而音字はよあ
可利不 やうひらまく道引きのうへ
あふれ たまみつまも まかまえとまつて
内はよのまわてまつま もかわ風ふ侍は
きくとづるえ馬ぬけに うきとづるえ
ゆくとまく まくとまく まくとまく
えとくとく とくとく とくとく
みとくとく とくとく とくとく
みとくとく とくとく とくとく
万葉力巻四 二胤譲三度月に鳥日鹿で紀事
侵而過改めアタ走先
キテキテキテキテキテキテキテキテキテ
つるの御すみ人眼即とゆふたゞ
まくひり今りて走即す。井の石の入
わくか庵へいしとるといひて庵とす
わとうとまとうとらすあそば
いじんとまうわうとあらうとすまう

りくとよみあへるやふらはれ
くら波瀬人のよひを後れわ
れそとまへかわきくいは
ゆよまやわく後れわよひす
むのよもとよも

こよそすは
あらわるの?
はづく
ゆき
ぬき
わらひ

後れぬものいきまくらの
そつまく月のとづく
まへせらへ國主大臣
まへ奴め

の氷 波瀬の中將君よりてねまうらとまつれあり
とはゆきうていたいわくよろひますすとまつれ
キやせふも其めりとまつて夜よひをとてうたのめ
ととく井ぬくのうのるすもくらうとくと
思ふあ意経君とてんとくよりうよ往月のとまつ
月うりへんえどかしふゆうやくうのうはくわくま
てとようと優れ利とくのよとくすはくわくま
がく扇のあれりのすよりとくうの氷とくくわく
よううとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
うすじもわくとくとくとくとくとくとくとくとくと
のとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
あをうんとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
けうとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
す細歌立とく

断簡言

一天地のすよふノリヒツをとくれりとくあす
ちくさしとそくの外功皇后的新羅を
うちかく时ゆうの石と御裳へりに
けじこゑおひりしや是誕生わ
ゆくすり件の石とくふあよとくす
但ひあゆれりとく波瀬なづらしや
件石の施前國治土郡除ひ材す負厚隙
あ岳よす有二石太へ長一尺ニ寸六下圍一尺
八寸六分半十八分五厘又少へ長一尺一寸圍一尺

八寸至十六寸十丈以上如鵠子手足善好中不可勝論所謂徑戶壁是也此二石肥而圓故
称郡平多石而取去深八九里北來入下馬頭
城下老傳曰息長三女今江討新羅國時用
兵數多石并着御神中以鎮懷山之先王立
碑也

牛之の死

云々まよひゆるは金す従夕庵
とくまうを力まのまいすりもひり
とあり相なりわよりてあとゆて以
まれすとくまうてゆめりあひゆるえ
ゆふ木て船すすり木くすり船
ゆふ萬葉觀音も送れぬ實あり
故にそもてもつてゐ
ア 四 五 九

一
考
の
わ
け
の
よ
う
に
は
行
役
と
き
て
お
ひ
く
よ
あ
れ
万
事
の
多
ゆ
き
も
ひ
く
よ
あ
る

ゆめりまひりくらでみかんす
もひしゆみてにわきよどきてかく
もや楠の原に植え移せり
一中より人をわすべにふるゆ
物とよどり事あるを
くもゆきすりんや併用ゆゑ
よもすくわくのう因みえく
じくの向か頬あせてはく

今ノ

一
ちのまゆのじよくすむるのふ
ともかくもあてこ下へどひをとる
玉よしのまゆせよみこありてと
ふわとよくは波ゆるのゆよまよ能
よわうととくとくとくとくとく
一
じめやくらもくらぶりみけいれら
わきいとくとくとくとくとくとく
て年正月のはくまう旅をみ守せさう
内みつる山川をうちわざく

一
はれ正月野打速樂ひじりよもう
ゆうよ天降雷るぬ下のまのくら音
さすわざくとくとくとくとくとくとく
物ひくとくとくとくとくとくとく

一
まゑ野よとくとくとくとくとく
ぬあうるよとくとくとくとくとくとく
やうとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
有種とくとくとくとくとくとくとくとく
有十五精絶挽歌とくとくとくとくとく

一 わきくみあひひのとよもへらひりら
もあひるてやとゆみゆいとんが
行きかどもあうじくしてアドモ
くすくしりぬあらとよとね
ウヨウノウヨンズミタキシムルヒト
キトニテヤ

一 朝霞のやうもるの風ひつわ
つるこても月十巻と上同様とて
よまくわらひしやつづアヌ船行
ひやハ麻火ヤトツナリ柳田廬者少^{タマ}

セヌヤ河村雲隱は琴謡せきを大それすの
くに別事のすじゆめの奥とく合て
絶ゆうれんり清浦抄とて

一 そよ物の橋れいやうと致う大高へま
すみうと清三郎天王寺雖はえ千時上を無縫
や波あいたに橋諸先家や江戸舟駆あ
時々くよりの繋かく橋の十の橋で川
うりとわうと波をすくい但手附と
みの橋と有きうりとれよじてよけと
とくよのとよれ國うとめてよけと

やあまく板とくよめりやうやうやう
わだまなとく說言ます

一あいとゆくとあくべたてのりのり
へよねはくとよくわひとみんむな
くじさんをくわたてくわく伊また
ぬくよばくつよるのきくよもうえ
さんかくとくよくとく

一こすのけみかくあつよし
いきあれどくわくとくれきくしらる
のゆうづくのくよきくとくいとよ

一ほりとくやくとくのみうりのくらく
きくじけくとくくわくとくに黒く役鷹
一二の黒くとくしきくとくのくす
秀へと太和わ純

一まくゆくとくすくまくゆくとくねだとく
くらくとくとくわくとくわくとく
わくとくとくわくとくとくとくとく
てとくとくとくとくとくとくとくとく
うくとくとくとくとくとくとくとくとく

一おもとれゆくとくとくとくとくとくとく

うきんまつりけよひめお大伴純親比
右御子狩放朝令奉使瀬國けよ船沙
利とおもつてのりのりていかふ難
去船とまつてみよ舟とまつてねと
くわくやじふくわくわくやじふくわく
きくわくせす又天流あとす以是可抗
南え肥前國風土記曰有武小廣國押猪突
皇のせよ大伴狹卒彦造経那の國とあ
めう猪く百附國とあくわくあくわく
てみ村よいりつみ則藤原村オヤ水を

號もつ其志もへよ勝りきり利とお日
みとおて帰るわく婦利とおひ
て坐てくう川とおひのくみ川よ
りのねは平彦連舟とおひのくみ川で娘
子とおひてとおひとおひとおひとおひ
ひとおひとおひとおひとおひとおひと

一
高とおひとおひとおひとおひとおひと
のあまよあがまよ上憶良、福浦ぬ
まよまよ河よ道遠す時はつすりやま
河よ河よ河よ河よ河よ河よ河よ

りとももらゆらよと白く年よ
今ひはる。まつといすま
ままでてかてとひりつて
すらつて下りよつみてりつて
万葉のすまむいふかよじか
そめえの今ふわきのあらの家
出でまくら
天平七年瓦理
れどもてほんにかくはまくられ
れどもいひゆ。新羅國
の主とんて朝。もと主大納言

大津浪人之家よしとくの宿山
おまかせお老太家右川今帰依舎
事經有田温泉不令寝御山口
ゆて作古矣

一
我へとすまう
あやめのそよ風
内大臣道延の筆を
あやめとわくら
もうかみふくら
ぬくら
ひづるのまん
あやめ
一
あやめのまん

中まであつまつ雨のしるど禁シテ
ナリあらとまへ三入のゆう一時金
かあくまにてく彼やらすふんあら
何らん但しいれよしみれをきてあまち
のそれはらうのくわくとくわく
楠れえり

一 めうまの野ノのかれぬひよみえ
はいりてまどつゝかむらのまのえ
しますこれの家持ハサシタ天娘アマメとくまろ
巡ツルすやゑき件ヒサシタめうまのよ

一 と野ノむらゆみて何ナニいなゆりとも
なふかカふりしてわきととつてく、秋ハ
野ノのなせりてじゆまのれレすす
れれふくよがすに因ウニ下トトか
がふれふくよがすに因ウニ下トトか
きくわくわくとくわく

一 おれひしとくまのまのみにと
あらとて取ハサシタいのひしとみ
きとづくくやまくとみとみとみと
いはんすやまくとみとみと

くはきりと梅の事があると
もさうお尋ねますと、みゆくです
しるまへはつてあります

一もすのからぬるてあ
といふと、わざしらもまのめう
よきよなにづけられぬ出ふるが不潔
圓は如蓮れどもとづくをよかまな
生立ちする水よがいふ、水よ幸
ひよみとけんかくはう應を
よもよしとすやうにまし

いもうてはやうてのれわざしとつ
ひふわす

一もすのゆりゆきとてきあ
一れも(今)日下紀天照大神の御
室御舎と行ふれなり圓のゆ
さんありす。彼圓多は重火で火と
よい蠅邦外タニ上みと(木)夏多(木)木
乱ぬゆやよ邦外れわざもとくふ
こうじと六月移すと元坂如萬と云ふ
ひうて下りて(木)木下りるま

くのよりうるよ八十法事とつて回て
のこもくもひきりよあれよまし
列はす。おめらす。あたそぢやゆけ天
穂は圓をかの篠下す。革手紙中圓い
その根えりとまぬれどそれくわり夜
の着標火をくまとういもじか力有蠅を
一あきうかげりくめりの升れあこまゆる
わくわくふく万葉寺十六云葛城王遣
于陸奥國く時圓日放業緩急黒木基代
時王意不收怨色顎而雖設欹饌不肯罵

樂於是。有前東女風流娘子尼平捧觴
右手持水轡。く王膝而詠い。奇余の王意。
悅樂飲絶日。乞。遺玉万葉不ほく
葛城王。は給姓左大臣橋諸兄をすり

一
り。海。く。の。よ。こ。り。そ。と。そ。そ。
そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。
そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。
そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。
そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。
そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。そ。

一
ひくよゆらふれとせ、今天平元年
二年四月、有言侍後聖子王事を令侍
内裏へお屋垣下即賜玉幕肆寫下
時内に鑄す有源朝臣奉勅宣講王事
酒壺の意作手賤詩仍無詔有旨陳心諸
作、向や右え太中弁大伴宿孙家持作但
依大義政不堪奏、也是よりて之は只
幼良のねよしと命令のつゝと
而後執事はあまくまき致不審事
と

ナす織はる日わたり奥でもとよつ
つそじつももわねの日じとくわとく
やとうり又とわとうじつるふかよみれ
とつう、お経よつううつうりとれ
んあもつてのねとたの事とまえ
てゆよめれとがりととゑ
ミトチテ又のととよばうれ
りづりしひくへてぬへりづくふう下
さよみをほく、ねぐとよくやまうこれ
ひてみえもすり、彼京極鬼暴

の頃人少りのうめす只今よどす大
ゆきすととやまきくもとて所ふられ不
審有りすあるもくじにひつづきすら
うれすのあいりまみすゆく
うきすりは因以せす様上へて手辟す又
後成りたる波上へ古事記りづき
如行路や波如せす夕波上へ我と之
うす可え日かすまく一思慮を
一れゆり代もよもてうきのあゆみ
えのあれてこそこそとれゆりびの

あれのじつくことまゆゑとく
一既葉和の帝直下りしとぬせねりま
直あとをつて一既より一既とて
とつてしゆく葉和萬や直萬又一既
わら萬のまへぬ既下り一既萬後れ
既又直萬枝のまへ枝とつて是
既えとへト枝下り是と後れ既後れ
しきじとくとく

一
やつまもれありやうりうりす表いふ
やつまもれりんれ貫くにあつ

秋葉とよきやけのすて夏叶あら
ちくれは後れへんねとつれと
香風晴夏の秋葉とよひよりや
安良をりうのむよするよも

一
すまむれあらぬねよみけりとせ
へみとなふよきうきんじ後半後れ
そろはめにみえくわすれし
とくられ國とくわすれし
あくとあくとくわすれし

ゆつてみれとくいせ
ゆるるるるるるるるるるるる
くるとくらんとくらんとくらん
やられきまくらんとくらんとくらん
中よー人のゆくとくとくとくとくとく
ふくと思えてあらんとくとくとくとく
ちよとくとくとくとくとくとくとくとく
みくとくとくとくとくとくとくとくとく
みれりとよりとよりとよりとよりとより

てせせ節とくせせせせのせせ

らぬよとねばゆく

一
もすれまわきひよつまされや
ちよと有り是し家持ての事と
家大娘よそりお離後數年後今れ
因はまよそりてシトミ
よもよもと萬事よも用とつて
志すやまとすとすれえとすれ
つるむじよ相後れかよつて
の親と二人きりあがきとては
立つるじる年をかでとすれ
かしらあう人よはよとひり
まくらをもひいは先せらへては
れまくしりいはぬとなつてわ
かよりもよりもんじまのん
とひいてはよりよいしつゆ
やよ年つもてあらりよつて
とてアヤムよもてててて
あらりよアヤムよもててて
角よくくじりよつよもと人の風
いとよすらすれいじて章事と其

はのゆはのゆはまなみつねようて
例れどもまことにひじりとくじゆう
らる成りやすむすうきよきく、方
をもいふくとしむとしむとしむと
やあとつて日とくじ夜ともい
りてみよとわきよとわきよとわき
日とくじ夜とくじ夜とくじ夜とく
と育てぬとれぬのとねとゆり
思せぬとゆ、事わきよとわきよ
ゆかんといひりよとせられよ、
けりまへあひあやよなむすす年月と
とされよとくろすす年月と
あきくゑよみくゑよみくゑよみく
りまと持てまちよとえりうきくま
とんとくとくとくとくとくとくとく
室よとてあつしのあくすわを裏
こらえこもとくわとわくわじあく
日のうちれすとくとくみえじあくと
きとくとしてあひじとてあひじとてあ

は月中にありま事をとあるのみすと
うり葉落とくもくらむるりんぐ
てくみえをなむるわくぐくの極へ
らひりまやといづ

一ソシウトトドウスノハジマ
一コヨムアモルル

一ミならへてソスモラヒシテヌミヨレ
中れあよすこゆうじくぬひきくも
や萬時行ゆならふもすゞシイロ
つまよな

あよすきらうそーりと云先

定家と同様く

一ソシウニテウツノミタケのそれひや
病よわね

一ソシウソリヤソミ
ゆせうひやの中よひ々一死よと
こうち。そうち後れで郡とつてアヌキ
みすと耕していもくひのうひの四
八年やあととちへりやふとつる
きれえくふをくわくとりのやう

之郡よりゆきてゆくや。おまか
めにゆきふたりとてゆき貴へ、いた
日記よもじりとてゆき山行ともやひま
く。ゆきふたりとてゆき貴へ、いた
らへあれやとてゆきひつよひらとてゆ
えくやかとてゆきらとてゆきれども
の圓れぬ信なり一死よもゆきやる
けやの中よとシテ

一
我の意からひきの石をなづりし
うきてとてゆきれども

今そり石すうううへそつりあ
れとひゆけむとよつゆきうき
のやみのゆくゆ一死の法体とを
こつゆくゆあつゝ有因縁乞
細疏不能勘

一
あふとあまのうへとすううへはみ
とくとくやせ。翻ふんふつき
いわくとくとくえれ奥よけ
一
しづきもとくれりとくとくとも
一
ゑんと年とまくわいとあ

てへとも三年の事へりとす。人よりかくすわひみてとくもといまじ
いはるす。年へけめとく。年へやまく
せきへ危急況也

一
ゆう事へもの志滿、衣うらみは、身もす
きとくにぬりて、やう是正月朝日君降を
あ。あららとお、敵御もよふ。之
ものも洋衣、事れうる。よんの志滿
よそもとくにやう。子細而故況は、有
う況も誠叶例而へゆきとく必不可

信其儀共自むすと孝武帝崩五年
正月朔日君降日は夏王義素をとどめて
君とくに六岁の不となくて帰とす
帝憲とくに、いわく、はとてすとくア
一
雖はとくに、みくとくとくのしよ。此月さ
へうよけつれ月の望とくのとくとく
も十五日より三つて取つて、凡杞朴子高
月く精生あり是以月盛而詩歟。大生是
ハ大吉小吉とくとくとくとくとくとくとく
もとの風とくとくとくとくとくとくとくとく

つり事も不可遠

一
角のうへきくにじんとまわる程よ石ノ井
おとめそめ(まき)是あらへてゆかぬま
キニテモ行り石す。すもとゆく也明錄
よ行き者自婦ありまといひよき
うひくとゆくゆく波女たむすむるとし
てま思のゆすてゆくひまゆくゆく
さんくもすりまうらすゆくのまみ
らなう死ぬやうて石よさくよなうも
めうくのあてうさく其は波山と
やまとよ云波石と呼ま石りと至良昌
や山此雖有美洗付一物弋代洗す。安強相
處也

一
ゆう年とみえでかくはまくとれの
ゆくとてとて有きうちれの其事氣うと
けす。あらへ細々温衣者不足とゆりと
河又騰雲如涌煙密々如散絲とくま
ゆくぬれ似矣。——
一
情あくにせむりへあらきりの深き山
ちとづくよりの育ててゆきてほの

一
あくまうらとしのまつりあゆみ
くまゆにいづきをさとさしはまの風
あくまうらとくまとく珠油れ物あくま
とくまとく人免やわよばくよ
ぬのまえりのくもてく象れ立
す
お精まえ

はくまみのいとんとくわのまくし
こめそじてひまのよしよし又あること
りて遠くからありと危難現もつて
一秋くまと月のうのまやからえどれと
らすりと月のねは實もふ
もみえとおの風よらすりと
もえれ月のうとくとく有能とえ
ゑ名荒云月中有河川よ。有檣あ
き五百丈をよ。今人あり樹とくわせ笑
名對文西河人年十六也とまきひもと
うに有りつて是とばへたとことつ
事か典云月の中に桂竹よわす素
亥云圓波捲地よ圓波樹わ。一者波利
質タ一名於樹も。八百で千里樹陰月
中よ理たり誠よつて。もくらえまく望
と月の中のつて。よもよつて
一秋の月志高くとて。もくらえまく
じよりよつて。よもよつて。わあのとこと
じよりよつて。よもよつて。六月。紀日半
代主外。中よ。八主。奈葉。難とつて

てうづくまうぬくつア

一月三日みすすよとあくらうひあれ
アモスムカトリシホシんわあれもく
アムヒトセアリ、みのりにこ有ゆ猪
馬帝月明星稀、鳥鶴南飛曉樹に西
何枝可徑云之

一遊つはま葉りく月けのへた
ちうじめりとせりすらゆつはと外
代は天稚彦とほうて葦原中園
祁毘々うて海あめなうすーて

即ち四玉くやよ下照那とめくら仰ア
ミヤコすみ附よる宝靈モアヤ
キをあくすきやとうソスミー河内
わいみのとまへゆつはよつゆと
ナア

一あきらよめてうすなまのもべすみ
ちのぬ物ゆふよとて海へとせてこ
すなとひき下はみかと風のぬ
んよあみのくしゆやすみすみをと
りすやすくぬゆへよもい

りふす

一天川うみ、かのまろわせれやうし
トとわすよと成るうり者つゝまのれ
时よ、首きんじねめどり、あひけりう
安何あう、トモすまほひよきとまけ
まてあくづけりと、あくまとすり
とけよ、寵有きう其ねりくらへり
れいをねりまつよたひめめでうう
まきくじひめいきあく、こりつまきさ
てモレモトヒキ、あれんまく事やく

今り大和國薬師寺すく、源よつも
ととくらて、みれとうへありとあくじにあく有
り金言園記曰漢武帝張騫とつ
うて河のみがととくあじ騫奉牛
圓よつも、あがとれ川をとて河と
あうととく騫へく漢帝のつひく
川の源ととくしやあがとれのつひく
て漢帝よゆみゆくととくととくす外
もらひづれうとくと河とてのとくす

志む又一の塊石とけり。尔言羽状石有
もていふくもふくこれが核石なりとや
つひひうゆかわぬくらすうりよの
おうりしよも何すあひゆうとつうき
と年河にてうづくをれ可る
一あひきの浦のまきりわきと
りとくじりてうづくをれ
者天地丸まくまく此邊まくまくす御
山よすゆくゆきに河とありかよれ
圓のくわくわくとくわく行くわく

タニノ河の河とくはあり妻日下紀の
田舎かよみえくはりゆきよのつらうす
ちく河とく義よじくてありひき
やまとすや又波瀬捺圓よ一角仙人と
りぬりうぢいよ一の角あいてやまと
の河わくで多量と既て立外通と
いはり河めうてやまとふらわくとま
て立とくとくアヒル河とひくと
とみとくがくアヒル河ひくと

かのあすく子細にあつて有り人
をりておはぬとされどりてまへ爲情
すとよとらすゆき鳥情よすうゆと
それむけよあゆうとすうゆと

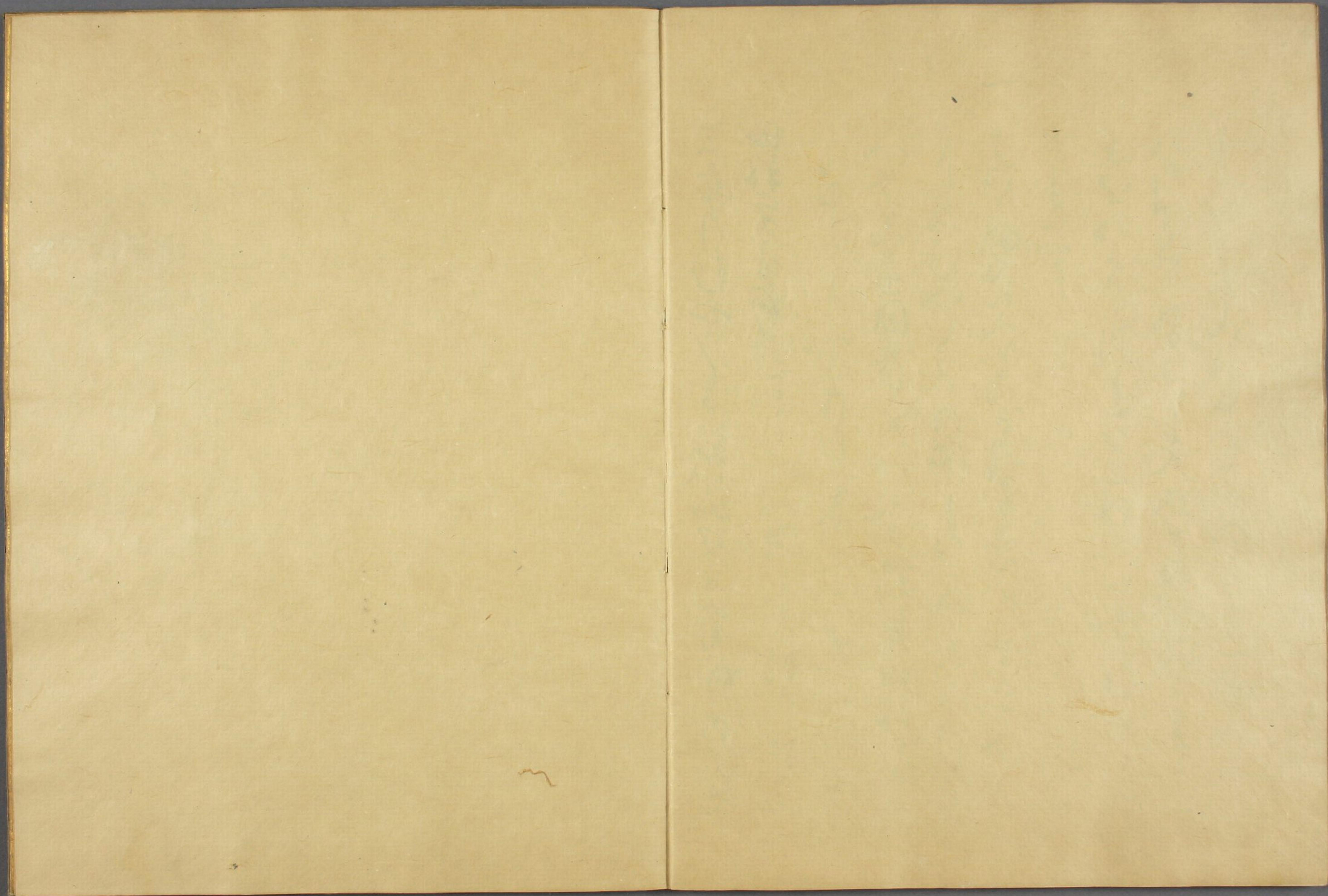
一わらうて三病のすくいと
さもせ松もすら門世因縁じ
爾よせ河男夷あもしりみ
えすゆふらとみるくみけま
つてつるまばほまんたらとんのあらと

生ふんといひひまとよのくらみ
そもゆくみをねてりゆくはのく
一まのくらよなきしいとあまとみと
こひくとくぬとあまとみとくと
ゆくくらふとくとくとくとくと
てかわしつた夜とあくとくとくと
あととくとくとくとくとくとくと
けまわすとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくと

一 ゆくよしゆきてゆまへと帰の外
れいかくねりらよひなまのとお、うと
まきれうりまことわくみの、うま
くもつて

一 ものゆづりこりゆよきりすりや
うれしやの角よりぬともりき
くやどを圓者とひえ隆奥かねる
ふゆきよきり本

えりしやくは山よ有角の多
くもよ



以下
う丁
白紙



